

論考部門

人口減少、高齢化時代の 集約型都市圏構造 ～京都府丹後地域を事例に～

(2013年1月号)

矢作 弘

今般の受賞の連絡には、些か吃驚しました。予期せぬことでしたよし。選考にあたっていただいた先生方に感謝致します。「縮小都市」に関するヨーロッパ調査が早い時期に決まっておりました。授賞式と日取りが重なり欠席いたしました。失礼をお詫びすると同時に、選考委員各位、及び出席されました方々から拙稿に対するご意見／批判を聞かせていただき貴重な機会を逸しましたことを残念に思っています。

ここしばらくの間、「都市縮小」について内外の事例を調べています。研究者というよりはジャーナリストですから、現場から帰納的にモノ事を考える習性が身についています。海外については、デトロイトとトリノを繰り返して訪ね、その縮小事情を調べています。

いずれもモーターシティです。20世紀は「車の世紀」でした。車移動を前提に暮らし方／働き方が決まりました。自動車産業は裾野が広く、20世紀の産業社会を圧倒的なパワーで牽引しました。経済のグローバル化でも先陣を切ったのは自動車産業でした。そのモーターシティが縮小都市になって久しい。

昨年、デトロイト市は財政破綻しました。それでも昨今、都心からその先の大学街までの界限を中心に、都市再生の動きを観察することができるようになりました。一方、トリノは、21世紀を迎えたころから人口の回復傾向が明らかになっています。両モーターシティの縮退、及び再生の動態、そうした動態を生み出し、支えている「都市社会システム」を比較研究することが当面の研究課題になっています。



矢作 弘 やはぎ・ひろし

1947年東京生まれ。日本経済新聞社編集局記者、ロサンゼルス支局長、編集員を経て大阪市立大学大学院創造都市研究科教授。現在、龍谷大学政策学部教授。この間、オハイオ州立大学、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス客員研究員。主な著書に『ロサンゼルス』（中公新書）、『大型店とまちづくり』（岩波新書）等。

論考部門

伊勢神宮と式年遷宮

(2013年3月号)

飯田喜四郎

中世建築を主体とする文化財建造物修復に関する3年間の研修を終えて、私はパリから東京へ戻りました。宮内庁に暫く勤務したのち、名古屋大学に移り、ゴシック建築の研究を再開しました。当時は辛うじて戦災を免れた近代建築が再開発により、次々に取り壊されていきました。

明治村開設の準備をしていた谷口吉郎先生にはもちろん協力していましたが昭和40年代初めの北海道旧庁舎を皮切りに、旧名古屋高等裁判所、四日市の旧諸戸邸（コンドル設計）、山口の旧県会議場、広島原爆ドームなどの保存に取組むことになりました。これらの建物はその形式のほかに建築材料もできる限り保存します。

それに対して伊勢神宮では建築材料は式年ごとにすべて更新されますが、形式は踏襲されます。戦国時代に暫時中断されたので、今回は第62回遷宮になりました。

平成5年の第61回遷宮では、私が宮内庁に勤務していた当時の上司が技術総監に就任し、私は新築殿社を監理する技監になりました。神宮司庁によれば嘗て朝廷は技術総監と技監を神宮へ派遣して新社殿と新しい調度品を建設・調製し、それらを神職に引渡したとのこと。しかしこれでは旧社殿の解体工事で発見された欠陥を、設計者が改善する機会がありません。60回以上に及ぶ式年造替にかかわらず、柱の腐食のような基本的課題が未解決であったのは、このようなところに原因があったのかも知れません。

この小論に目をとめられた読者の皆様ならびに選考者の方々に厚く御礼申し上げます。



飯田喜四郎 いいだ・きしろう

1924年東京都生まれ。フランス文部省建築局文化財保護事業部主任建築家事務所々員、総理府技官（宮内庁）をへて名古屋大学教授、愛知工業大学教授、神宮司庁技監・営繕部長、博物館明治村館長をへて現在は愛知工業大学客員教授、神宮司庁造営局技術顧問、博物館明治村顧問、名古屋大学名誉教授。日本建築学会大賞（2003年）受賞。

論考部門

建築を見る写真家のまなざし

(2013年9月号)

村井 修

ーインタビュー当時の社会と環境、丹下健三氏についていま思うことー

拙著『写真都市』に序文を寄せて下さった丹下健三先生の代表作は代々木のオリンピック競技場であろう。その完成当時米紙タイムの取材で競技場を背景に先生のポートレートを撮影したことがあり、その後作品の多くを写す機会に恵まれた。今回貴誌から賞を有難く頂いたが、その論考でも『写真都市』と丹下先生について多く語っているが、これが掲載された2013年は、その先生の生誕100周年でもあった。その年に2020年の東京オリンピック開催が決まり、ある感慨を覚えた。一生に2度も都庁舎を設計された先生が健在だったら次期オリンピックへ向けてどのような計画案を発表されたのだろうか。そう言えば1955年頃「建築と芸術の総合」をテーマに開かれたユネスコの国際会議に出席した日本代表、阿部展也氏の依頼で撮影したのが旧都庁舎の岡本太郎氏の陶板壁画だった。当時の写真の一部はガラス乾板である。その後カラーフィルムが主流となり、今ではデジタルに一変した。

永年、建築や彫刻など都市をテーマとして写真を続けて来たが、建築の専門誌との関りも多く持った。近年そうした雑誌が減って行く状況の中でメディアとして『建築と社会』の重要性も増していると思う。建築家と共に建築に携わる写真家の発表の場としても永く続けて貰いたいと思う。



村井 修 むらい・おさむ

1928年愛知県生まれ。1953年からフリーランスとして建築誌、美術誌などの撮影を始め現在に至る。主な撮影として、丹下健三白井晟一等の建築作品や「関西空港」「新国立劇場」「京都迎賓館」など。主な受賞に第37回毎日出版文化賞 特別賞『世界の広場と彫刻』（1983）第6回東川賞『石の記憶』（1990）2010年日本建築学会文化賞、2012年日本写真協会功労賞等。